

## 太平洋戦争特集記事

### 戦後70年 — 激動の昭和の 生き証人は語る

#### 慰安婦に関する歴史的真相 女性の尊厳を重んずるなら さらし者にするな

今年の8月15日で、終戦70周年を迎える。「終戦」と言うと、日本が戦争の廃墟から立ち上がって高度成長期を迎えた頃に生まれた学者たちから、「日本人は戦争に敗けたのに“終戦”という言葉を使って敗けたことを実感しないから、周囲の国を傷つけている」と言うような傲慢な批判を受ける。しかし、敗戦国の国民の悲哀と惨めさは、私の世代の者にとっては到底忘ることの出来ない体験である。

「戦争は2度と起こしてはならない。周囲の国との友好関係を保っていかなければならない」というのは、我々の世代が身に沁みて実感したことである。「終戦」という言葉には、「やっと、戦争が終わつた。もう2度と戦争はいやだ」という思いが込められている。1945年8月15日の夜に、何ヵ月ぶりで、電燈を一晩中つけて「終戦」を喜んだ当時の一般国民の気持ちちは、戦後生まれの学者たちには到底分からんだろうと思う。

4月23日のワシントン・ポスト紙に2面に亘って大きな写真付きで、「私自身の名譽のために立ち上がる」と題して、元韓国人慰安婦の話が掲載された。安倍総理の訪米に合わせて、恐らく韓国系アメリカ人からの要請ではないかと思われた。この記事を書いたパメラ・コンスタブル

(Pamela Constable) 氏はワシントン・ポスト紙の記者である。彼女はブラウン大学卒業後、1994年にワシントン・ポスト紙に入社、1998年から、パキスタン、インド、アフガニスタン、イラク関係の記事、ことに人権問題に関する記事を書いている。この韓国人元慰安婦の記事は、ワシントン地区の韓国人団体に招かれた元慰安婦をインタビューして書かれたもので、インタビューは通訳を通じて行われた。私は日韓の間の歴史的認識もない記者が、通訳を介して語られたことを、そのまま記事にしていることを非常に遺憾に思った。そこで早速、私は彼女に手紙を出すことにした。ついでにアメリカ議会で、慰安婦問題を執拗にとりあげている日系3世のマイク・ホンダ議員にもコピーを送った。スタッフたちに読み捨てにされるであろうことも承知のうえである。しかし、多くの著書を持つレポーターや、日系米人の下院議員の歴史的認識のなさと、最近ますます増えてきた在米韓国人が数を嵩にきて日本を貶めようとする現象に、書かずにはいられなかつた。以下は英文で書いた手紙の日本語訳である。(英文でお読みになりたい方には、お知らせくださいれば、お送りします。)

\*\*\*\*\*

#### コンスタブル様

4月23日の首都圏欄に掲載された貴女の記事を読んで、私は慰安婦に関する事実について、声を挙げなければと思いました。私は1930年に日本で生まれた日系アメリカ人です。1966年に渡米し、1998年に米国籍を取得しました。私は第2次世界大戦当時、日本の首都東京に住んでいましたから、1944年12月から1945年8月15日まで、ほとんど

毎夜、B29爆撃機による空襲を経験しました。1944年8月には、全ての中学生・高校生は政府に動員されて、軍需工場や軍の施設で働かされました。工場や施設で働いていた若い男性が根こそぎ陸海軍に召集されて戦場に送られたので、その穴埋めに中学生や高校生を動員したのです。私は幸い軍の施設で事務の仕事でしたが、友達のなかには工場で男子工員が扱っていた旋盤を扱わされた人もいました。戦争が終わったとき、我々はこれで学生生活に戻れると、本当に嬉しかったことでした。

1945年9月5日、ダグラス・マッカーサー大将を総司令官とするアメリカ軍の占領が始まるとすぐ、占領軍の命令により日本社会を近代化する改革が始められました。軍隊の完全解体；財閥解体；農地改革；男子だけが入学できた大学の門戸を女子にも開く所謂学制改革；女性に参政権を与える即ち参政権の男女平等；両親の承諾がなくても結婚ができる結婚の自由；そして政府が認める公娼制度の廃止。

戦争が終わった1945年以前は、日本の貧困層に生まれた女子の運命は以下の通りでした：工場や飲食店等で年季奉公；一般家庭の女中や子守；芸者とか娼妓等の所謂男性相手の仕事。戦争に敗けたおかげで、日本女性（韓国女性）の地位は男性と平等になったのです。女性が望めば高等教育が受けられ、男性と同じような職業に就くことが出来るようになったのです。

あなたは記事のなかで、『慰安婦にたいして声を挙げている米韓のリーダーたちの意図は、日本人権擁護団体の注意を

喚起するためと、米国議会の日系アメリカ人の曖昧な態度をはっきりさせるため』と述べています。日本政府は謝罪を重ねています。過去に二人の総理大臣は謝罪文を送り、所謂『償い金』を払うための基金も設立しました。しかし、朴槿恵大統領は2012年2月25日に就任するとすぐ、『日本は慰安婦にたいする謝罪をしていない』と非難を始めました。また、『日本の残酷な行為に対する恨みは、1000年経っても消えない』と、世界各地に慰安婦の銅像を建てろと言ひ回っています。明らかに、彼女は日本の謝罪や『償い金』を認めないばかりか、日本との関係を正常化しようという考えもないようです。彼女が一回でも元慰安婦たちを大統領官邸に招いて、彼女たちの苦労を労ったことがあったでしょうか？彼女は元慰安婦たちと直接語りあったことがあったのでしょうか？朴大統領こそ『元慰安婦』をさらし者にして、彼女たちを日本叩きの道具に使っているとしか思えません。

以下は、貴女の記事のなかで、いかに事実が脚色して語られたかという部分です。

『フェアファックスの友達の家でインタビューを始めるとき、リーさんは1943年10月の夜に始まった悪夢を詳しく語りました。家族と一緒に住んでいた農家で寝ていたとき、外から彼女を呼ぶ声が聞こえた。そこで外に出てみると、日本の兵士と4人の女の子が立っていて、すぐ彼らと一緒に歩かされた。そして、汽車、トラック、船に乗せられて、日本のどこかに運ばれた。』

編集者注：これぞ如何に事実が曲げられて語られているかという見本であろう。いくら日本兵が残虐だったとしても13歳の女の子を、着の身着のまま売春目的で

連れ出して汽車、トラック、船で見知らぬ土地に運ぶような北朝鮮の拉致と同じようなことをしたとは、ありえないことである。彼女たちは、明らかに売春宿に雇われた所謂”女銜“と呼ばれるブローカーによって、売春宿に連れていかれたのである。”女銜“たちは人目にふれないよう夜ひそかに連れ出すのが通例であった。勿論、親も承諾のうえである。また当時、日本男性はカーキ色の軍服のような”国民服“を着ることを強制されたから、恐らく国民服をきた”女銜“を兵隊と思ったのであろう。

『彼女たちを連行した最終目的地は、日本のどこかの海岸近くの“神風”パイロットの基地であった。彼女はそこで”神風“パイロットたちが精神高揚の歌を大声でうたって飛び立つのを聞いた。

彼女は、基地に連れていかれるとすぐ、カーテンで仕切った狭い部屋に通されて、そこで兵士が来るのを待つようにと言わされた。彼女は抵抗した。そして、彼女が語るところによれば、まず激しく殴られ、次に手首に電気ショックをあたえるという拷問にかけられて、従わざるを得なかつた。』

この部分の供述を読めば、彼女は”慰安婦“ではなくて、日本内地の娼家に女銜によって連れていかれたことが明らかです。日本軍が占領していた中国各地で、軍に依頼された業者が経営していたのが慰安所です。そこで働いていたのが所謂”慰安婦“です。現在でも証拠が残っているそうですが、慰安婦の中には、当時の将官クラスのサラリーに匹敵する額を稼いでいた者がおり、朝鮮の家族に仕送りをしていたとのことです。事実、彼女たちは姓の奴隸ではなかったのです。奴隸だったら、どうして、お金を稼いで故郷に送

金ができたでしょうか。そういう事実をひた隠しにかくして、『女性の尊厳を傷つけた』とか、『性の奴隸にされた』とか言い回るのは、彼女たちを日本バッシングの道具に使っているとしか思えません。本当に彼女たちの『女性としての尊厳を』守るのなら、世間の目にさらすより、残りの人生を安らかに暮らせるように援助するのが”人道的処置”ではないでしょうか。

70年前までは、日本女性の地位は男性と平等ではありませんでした。ことに貧困家庭に生まれた女性は、家族のために犠牲になることを当然とされていました。アメリカ占領軍によって、日本女性の地位は男性と平等に引き上げられたのです。

私の歯医者は韓国人の王先生です。私が働いていた間、毎週通っていた美容院の美容師は韓国人の李文子さんでした。私が現在住んでいるリタイアメント・コミュニティにも2人の韓国女性がいます。皆さん知性もあり、よく働き、暖かい人柄です。私は、現在の韓国大統領が任期を終えたら、再び韓国と友好関係が復活することを心から望んでいます。

1945年まで、日本の女性の地位、ことに貧困層の女性の地位は低かったのは事実です。再び声を大にして言います。慰安婦や娼婦だった女性をさらし者にして、でっち上げた話を語らせ、日本叩きの道具に使正在のことこそ、女性の尊厳を傷つけるものです。歴史の生き証人はまだ残っているのです。』

\*\*\*\*\*

以上のように述べた慰安婦に関する事実を果たして、この記事を書いたコンスタンブル氏や、マイク・ホンダ議員も読んでくれるであろうか。そして読んだとしても、「慰安婦」にたいする史実を曲げて日

本を批判し続けていることを認めないであろうと思う。朴大統領の日本叩きは、明らかに効を奏しているのである。「女性の尊厳のため」と言うならば、かつての日本や韓国（朝鮮）における女性の地位の低さ、貧困層に生まれた娘たちは家族の犠牲になるのが当然と思われていた風潮も語られなければならない。中国で日本軍が駐屯していた各地に、軍当局から委託された業者が所謂慰安所を建て、そこに日本や韓国各地から集められた女性が慰安婦として送りこまれていたのは事実である。そして、日本内地で男性を相手にする場所は、政府公認の娼家であった。恐らく特攻隊の基地の近くにも娼家があったのであろう。娼家に送りこむのは“女衒”と呼ばれる娼家が雇ったブローカーたちであった。彼らは日本各地の貧困地帯を訪ねて、貧家の若い女性を買いあさったのである。また神風特攻隊が飛び立つ前は、厳粛な神道による儀式が行われて、もし歌つたとしても“海ゆかば”という重々しい歌であった。これらの事実によっても、ワシントン・ポスト紙に掲載された記事が一人の韓国女性の供述によって書かれ、事実が裏付けされていないことがわかる。太平洋戦争が始まると、徴兵年齢を引き下げなければならぬほど、兵員が不足していた。どうして朝鮮半島の農村まで慰安婦にする女性を強制連行するために、兵士を派遣するだろうか。証言者の全くの思い違いとしか考えられない。

5月4日、北星学園大学（札幌市）の非常勤講師、植村隆氏がニューヨークで講演し、集まった約80人の聴衆を前に、「私は激しいバッシングを受けている。この戦いに負けない」と強調したとのことである。

植村氏はかつて朝日新聞の記者であった。慰安婦問題が「捏造」と糾弾されたことに対して、「捏造だと攻撃することは、慰安婦問題を無きものにしようとしたことにつながる」と主張。日本が戦後70年間守りづけてきた「言論の自由」に対する攻撃であるとし、「勇気をもって辛い体験を話した慰安婦のおばさんたちの尊厳を傷つける」と訴えたとのことである。

（5月10日の産経ニュースによる）

植村氏はご存知ないであろうが、1970～80年代の、日本の高度成長期に、日本の男性は韓国、香港、東南アジア諸国に“買春旅行”に出かけたのである。ことに韓国が多かった。ソウル・オリンピックの前年に、私は夫と共に韓国、台湾、香港を訪れたが、空港でこれらのみっともない日本男性の買春旅行者のグループに会って顔から火がでる思いがした。勿論、彼らの妻たちがどんなに嫌な思いをしたことか。アメリカに戻ってこの話を憤慨して友達（日本男性）に話したところ、「なーに、韓国政府は日本男性の落とすお金のために、目をつぶっているのだよ」と言わされた。現に、ソウル市で宿泊した一流ホテルでも、午後9時過ぎると、ロビーにそれらしき女性が出入りしていた。植村氏や彼らの仲間に言いたい。歴史の生き証人はまだ残っているのである。貧困層に生まれた女性を利用したのは日本だけではない。そして、「慰安婦」は強制連行ではなかった。当時の女性が強制されたのは、男性より低い地位に甘んずることだった。女性の地位の低さ、家族を助けるために犠牲は当然という風潮、そして女工や女中では手にすることの出来ない金額。これらの社会的背景を抜きでは慰安婦問題を語ることが出来ない。すでに、河野総理と村山総理のときに、強制連行でなか

つたことを認めさせたものの、謝罪文を送り、慰安婦に慰労金も送ったではないか。これ以上どうすればいいのであろうか？現在の韓国大統領が慰安婦問題を、日本叩きの道具に使っている限り、なにをしても無駄であろうと思われる。そして、この女性記者のように、歴史的認識もなく一方的な話で判断する人たちに、今でも世界各地で如何に女性の尊厳が踏みにじられているかを述べたい。

現在、世界各地で、そしてアメリカでも、管理売春が行われている。メキシコとの国境を越えて、少女を運んでくる“運び屋”がいる。日本で所謂“デルヘリ”というコール・ガールを派遣する売春組織の経営者の多くは韓国人のことである。70年前までの出来事を、いまだに誇張して世界中に触れ回っている韓国大統領の歴史的認識には呆れるが、看過する以外に対処の方法がない。それよりも、植村氏のような戦後生まれで、高度成長期に育った学者やジャーナリストが、正義感（？）をもって「慰安婦問題」を取り上げるのは、本当に事実をよく調べてのことかと言いたい。しかも、それを批判されると「言論の自由の侵害」というのには、呆れてものが言えない。何か意見を述べるときは、反論があることを覚悟で意見を述べなければならない。そして、反論に対抗できるだけの事実の裏付けがなければならない。市井の一老婆で、このようにささやかなニュースレターの編集・発行者でも、それだけの覚悟を持って意見を述べているのである。大学教授ともあろう人が、反論に対して「言論の自由の攻撃」と言うのはおかしい。彼も慰安婦のおばさんたちの尊厳を守るために、きちんと歴然たる事実の裏づけをもって説明るべきであろう。

最後に私が強調したいのは、近隣諸国と友好関係を保つことは大切である。しかし、間違った申し立てで自国の名誉が傷つけられている場合、其れを甘受してまで媚びなければならないのか。そこからは、眞の友好関係が築かれるとは思えない。このことを、韓国の大統領に同調して慰安婦問題を取り上げて、母國の名誉を傷つけている学者たちに言いたい。

そして戦後70年、朴槿恵大統領は就任以来、慰安婦問題を始めとして、日本のやることなすこと全てを批判している。彼女には未来志向が全くなく、日本と友好関係を結ぼうという意志もないらしい。6月6日、ソウルの国立墓地で開かれた朝鮮戦争の戦死者を追悼する「国忠日」の式典での演説のなかでも、朴大統領は「従軍慰安婦問題のような過去の歴史問題や領土紛争のために、前に進めずにいる」と述べた。さらに「困難に屈せず、必ずこれらの問題を解決する」と強調したとのことである。このように歴史的認識が全くない大統領に対して、七重の膝を八重に折つてまで、友好関係を築いていかなくてはならないのだろうか。前に進めないのは、誰のためかと問いたい。

付記：「日本国と大韓民国との間の基本関係に関する条約」（略称日韓基本条約）は1965年（昭和40年）6月22日、東京において調印され、1965年12月18日に発効された。日本の韓国に対する莫大な経済協力、韓国が日本に対する一切の請求権の完全且つ最終的な解決、それに基づく関係正常化などが取り決められた。1951年（昭和26年）7月、当時の李承晩韓国大統領が、韓国を戦勝国としてサンフランシスコ講和条約会議に参加することをもとめた。しかし、第2

次世界大戦当時、すでに朝鮮半島が日本の統治下にあり、日本と交戦したことはなかったために「戦勝国」として扱う根拠がないと、アメリカやイギリスを始めとする連合国側から講和条約会議に当事国として出席することを拒否された経緯がある。

1951年（昭和25年）10月20日から始まった日韓基本条約に関する会談は、独立運動家として日本を敵視し続けていた李承晩大統領の対日姿勢で予備交渉の段階から紛糾した。ちなみに李承晩大統領は日本の統治下時代にアメリカに亡命し、アメリカ女性と結婚した。アメリカからの強い押しによって会談は開始された。第1次会談は1952年（昭和26年）2月15日から行われた。そして、第2次、第3次、第4次、第5次、第6と会談は続けられた。1960年4月19日に「4月革命」が起り、李承晩大統領が辞任した。1963年に国家再建最高会議の朴正熙議長が大統領に当選した。1964年12月3日に第7次会談が開催され、1965年6月22日、東京において「日本国と大韓民国との間の基本関係に関する条約」が署名され、12月18日に発効された。日本の韓国に対する莫大な経済協力、韓国の日本に対する一切の請求権の完全且つ最終的解決、それらに基づく関係正常などが取り決められた。韓国が交渉中に主張した対日債権に対して、日本政府は「韓国側からの徴用者名簿等の資料提出を条件に個別償還を行う」ことを提案したが、韓国政府は「個人への補償は韓国政府が行うので、韓国政府へ一括して払ってほしい」と、現金合計21億ドルを要求した。そして、交渉を重ねた結果、日本は「独立祝賀金」と「発展途上国支援」として、無償3億ドル、有償2億ドル、民間借款3億ドルの供与と融資を行った。統

合時代に朝鮮半島に日本が持っていた53億ドルの資産は、朝鮮半島を占領したアメリカとソ連によって既に接収されていた。日本側は個人資産や国有資産についても会談中に言及したが、最終的には請求権を放棄した。日本側としては、現在韓国が主張している慰安婦に対する補償金も、当然韓国政府が日本からの支援金のなかから支払ったと解釈していたのである。そして、日韓基本条約によって、両国間の財産、請求権一切の完全かつ最終的な解決が確認されたのである。条約は英語、日本語、韓国語（朝鮮語）で2部ずつ作られ、両国に保管されている。朴槿恵大統領が、父親の大統領時代に結ばれた日韓基本条約をどう解釈しているのか聞きたいものである。そして、最後に彼女の歴史的認識なるものを問いたい。初代朝鮮総監伊藤博文氏は、韓国併合には反対であった。これは当時の併合についての会議の記録にも残っているのであるが、伊藤氏は「日韓併合が止むを得ないのならば、朝鮮が経済的に自立できるようになったら、独立させなければならない」と述べていた。ハルビン駅頭で安重根に撃たれて病院に運ばれる途中、「俺を暗殺しようとは、馬鹿なやつだ」とつぶやいていたとのことである。その安重根を英雄として、銅像を建てろと言い回っているのが朴槿恵大統領である。

また、6月2日の朝日新聞の11面に「慰安婦問題 識者と考える」という、慰安婦問題が日韓関係の混迷の理由となつていて、この問題について4人の識者の意見を大きく掲載した。3人の女性識者は1960年代から1980年代の生まれである。彼女たちは私が育った時代では全く考えられなかつた「男性と同じ高等教育をうけられ、男性と全く平等な

「社会的地位を与えられる時代」に育った女性たちである。その中の一人、小野沢あかね氏は「当時は日本に公娼制度があった。慰安所は公娼であり性奴隸ではないとして責任を回避しようとする論法があるのは問題です。当時の公娼自体が人身売買に等しい性奴隸であったからです」と述べている。この発言には、70年前までの日本の貧困層、ことに農村地区の地主のもとで働かされている小作農民の生活が如何に貧しかったか、そしてその貧しさを救うために、女性が家族の犠牲になるのは当然という社会通念があつたことを全く無視していると思う。70年前に戦争に敗けたおかげで、アメリカ占領軍の命令で、日本の女性の地位が男女平等になり、これらの女性評論家のように、高等教育を受けて社会進出も全く男性と同じように出来るようになったのである。この歴史的背景に目を向けなければ、所謂慰安婦問題も正しく語れないと言うのが私の持論である。

そして、公娼制度が認められていた時代にも、官憲に追われ、娼家で雇つたやくざに脅かされながら、命を賭けて公娼制度廃止と戦つた女性たちがいたのである。戦後、社会党から衆議院議院に立候補して再選を重ねた神近市子氏や市川房江氏は戦前も戦争中も女性解放に尽くした方々である。戦後すぐ、女学校を卒業して勤めた日本の会社で、昼休みに新聞の政治欄を読んでいたら、課長に「新聞の政治欄を読むような女性は、お嫁に貰い手がないよ。新聞を読むなら家庭欄を読みなさい」と言わされた時代に育った私である。その時、女性も何等かの職能を持たなければならぬことを痛感した。戦後20年、大統領令嬢として銀のスプーンを口にくわえて生まれた大統領が、70年前まで日本と朝

鮮に女性哀史があつたことすら知らないで、慰安婦を日本叩きの道具として使っている驕慢さを私は許せない。

追記： 戦争が終わって、学校に戻つてやつと学業に専心出来るようになった。友達とこれからは“英語”的時代と、放課後英語の先生が設けた特別クラスを取ることにした。クラスが終わつてから、駅で電車を待つて、習つたばかりの英語の歌を友達と口ずさんでいた。すると、隣に立つていていた老婦人が「貴女たちは、いいなあ。やつと女性も勉強が出来るいい時代がきたのですよ。一生懸命勉強して男性に負けないよう頑張つてください」と言った。小柄な老婦人であったが、なんなく威厳があつたので、「お名前をお聞かせくださいませんか?」と言つた。彼女は笑いながら「名乗るほどの者ではないけれど、私の名前は河崎ナツ」と言った。家に帰つて母にこの話をすると母は驚いて、「河崎ナツさんは神近市子さんと一緒に、女性解放運動に尽くした方ですよ。そして戦争中自由主義を教えるとして廃校処分にあつた自由学園が、戦後再開される時の創設者の一人になった方ですよ」と言った。女性が男子と同じ大学教育も受けられず、参政権もなく、貧困層に生まれた女子は家の犠牲になるのが当然と考えられていた時代に、「女性解放運動」に命をかけた方に会つたのである。彼女との出会いはまさに「一期一会」であったが、今でも彼女から受けた印象は忘れられない。